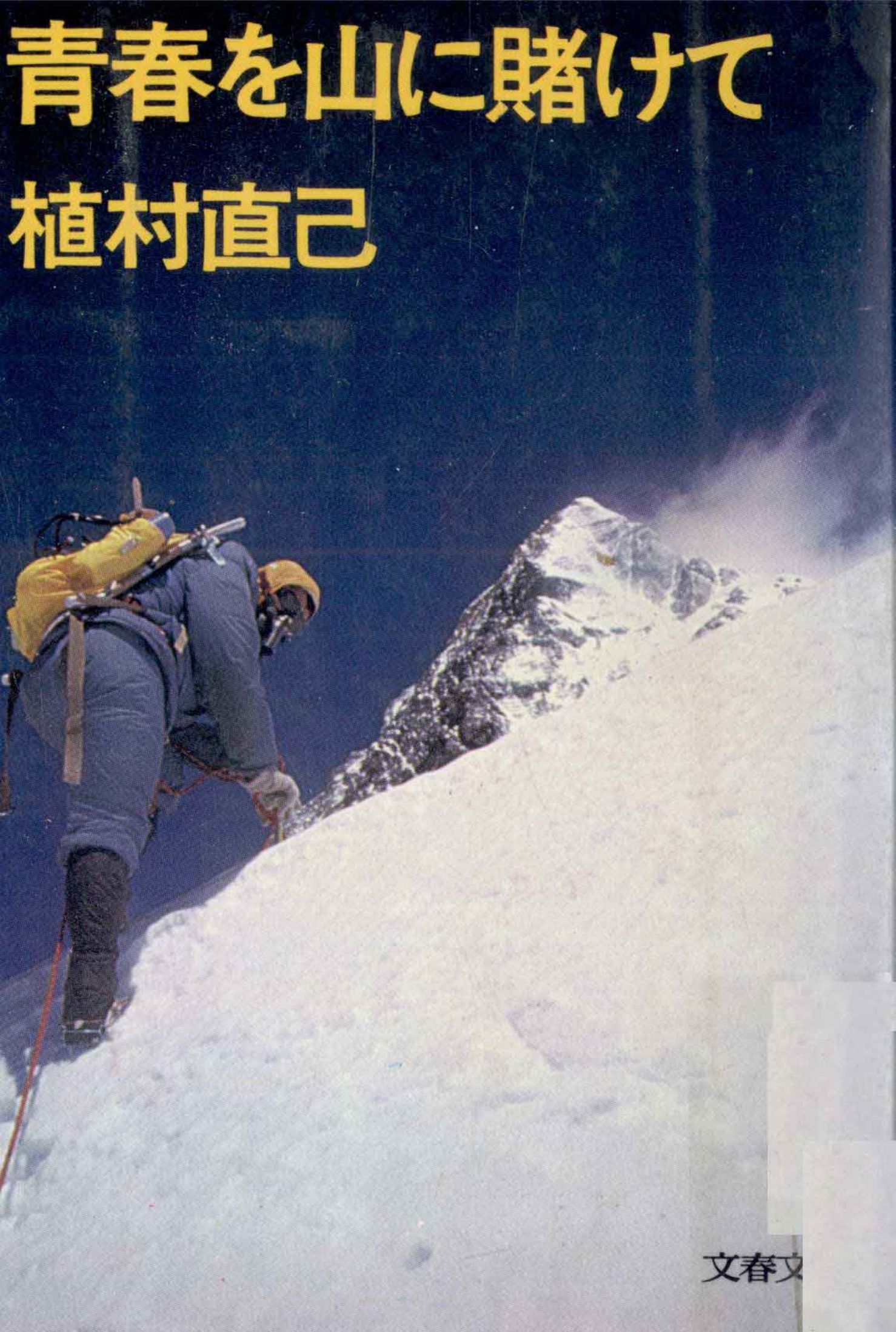




青春を山に賭けて

植村直己

文春文



文春文庫

青春を山に賭けて

定価はカバーに
表示してあります

1977年1月25日 第1刷

1989年3月5日 第20刷

著 者 植村直己

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-717801-X

文 春 文 庫

青春を山に賭けて

植村直己



文 藝 春 秋

目次

青春の日々	5
山へのプロローグ	19
アルプスの岩と雪	33
朝焼けのゴジュンバ・カン	49
マッターホルンの黒い十字架	73
アフリカの白い塔	85
忘れ得ぬ人々	123
アンデス山脈の主峰	139
六十日間アマゾンイカダ下り	174
王者エベレスト	196
五大陸最高峰を踏破	217
地獄の壁グランド・ジョラス	237
文庫版のためのあとがき	252

一九七一年三月 毎日新聞社刊

地図 高野橋康・精美堂

青春の日々

わが回想

いやいやながら山登りを始めて十年目、とうとう世界五大陸の最高峰を全部この足で登ってしまったんだから、われながらビックリする。

しかし、私は「五大陸の最高峰を踏んだ登山家」などといわれるとすごく恥ずかしい。山登りは五年や十年ではまだ初心者、私もほんの新米にすぎないのだ。その私がこんなことになったのは、まったく幸運とまわりの人の協力や友情に恵まれたからである。たぶん、ベテランの人たちは、私の山登りなんか危なっかしくて見ていられなかったろう。私だってはじめっからこんな大それた計画をやるつもりはなかったのだ。

なんとなく地球の上をウロウロしているうちに、モン・ブラン（欧州、四八〇七メートル）、キリマンジャロ（アフリカ、五八九五メートル）、アコンカグア（南米、六九六〇メートル）と三大陸の最高峰に登ってしまった。そして、一九七〇年五月十一日、日本山岳会隊員として、アジア、世界最高のエベレスト（八八四八メートル）頂上に登らせてもらい、そこではじめて「五大陸」という意

識が浮かんだのにすぎない。そこで私はその八月二十六日、北米大陸最高峰のマッキンリー（六一九一メートル）の単独登頂をやって五大大陸の最高峰登頂を完成した。

あれもこれも本当に幸運だった。エベレスト隊では「アニマル植村」などと、もっともらしいあだ名をつけられたけれど、だいたいそれまでの私のあだ名は「ドングリ」だった。ドングリらしく、私はモン・ブランでクレバス（氷河の割れ目）に落っこちた。そこからはいあがっていき生きているのも、こうやって冒険シリーズをまとめているのも幸運にすぎない。

もういちどいわせてもらおうが、本当にこれは自慢できるような話ではないのだ。もしこの話に、みなさんが、崇高なアルピニズムの真髄といったようなものを求めているとしたら、先にあやまってしまうが、私は失格に決まっている。

兵庫県の日本海側に面し、円山川の流れる国府村（現 城崎郡日高町）。私は、その山村の農家に生まれ、高等学校は隣市にある県立豊岡高校に通った。

家では米作のほかワラを加工して縄を作り、神戸や大阪地方に売っていた。大人だけでは人手がたりず、小学生のころは、牛飼いや畑の草とり、ワラのそぎ取りを手伝わなければならなかった。

中学のときバレー部に入ったのもその手伝いがいやだったからだ。放課後練習があるので家の手伝いなどできない、というわけだ。しかし、高校のときはクラブ活動をやる勇気もなく、そうかといって勉強も満足にせず、学校の反乱分子のようになってよくいたずらをした。学校の中庭

にあった生簀^{いけす}のコイをつかまえてストーブで焼いて食べたり、ストーブにゾウキンをつめて煙突をふさぎ、教室を煙だらけにして授業を中止させたりしたものだ。

明治大学農学部農産製造学科に入ったのも家の農業のためなどというものではない。志望者が少なく、入学が比較的簡単だったからである。もっとも、私が無一文のうえ、アチラの言葉もよくしゃべれないのにアメリカに行ったとき、この妙な学問は農場に仕事を見つけるのに多少役立った。

大学に入っても自分の将来にはっきりした目標があるわけではなかった。しかし、大学生活を有意義に過ごすために、大学のクラブ活動をやろうぐらいの気はおきた。ただ、自分には文化サークルや音楽グループに入れる才能はなし、運動部となると、みんな高校のときからバリバリやっていた連中ばかりで、どこにも所属できそうな部がなかった。

そこで、入学式も終わり、ガイダンスがはじまろうというとき、ふと思いついたのが山岳部だ。山岳部なら緑のみられない都会の雑踏からのがれられ、自然の中で、山にも登れる。またテントで一緒に生活することによって、おなじカマのメシを食えば、友だちを得ることもできるだろう。私は保証人の赤木正雄さんのところへ行って相談した。子供のころ赤木さんとは家が隣同士で、息子の健一さんとは遊び友だちだった。その健一さんは慶大に行って、東京六大学野球リーグの首位打者になり、プロ野球の「国鉄スワローズ」(現在のヤクルト)にもいたからご存知の方も多いだろう。

赤木さんは、

「登山には遭難があるからなんともいえないが、部活動は友人も先輩もでき、体の鍛練にもなり、有意義なことだ」

といってくれた。

山岳部に入るといっても、中・高時代に山に登ったわけではない。確か豊岡高校にも山岳部があったが、どんな活動をしていたか知らない。高校一年生のとき、まだ頂上近辺に残雪のある一〇〇〇メートルそこそこの蘇武ガ岳（兵庫県、一〇七五メートル）に息をきらし、クラスメイトと競争して登ったことがあった。雪をガブガブ食べ、舌を荒らしたのを覚えている。

しかし、富士山こそ知っているが、日本アルプスがどこにあつて、そこにはどんな峰がそびえているのかなんてまったく無頓着だった。これで大学の山岳部に入ろうと思い立ったのであるから、考えてみると無茶な話だ。

とにかく、山岳部なるものをのぞいてみよう、入部する前に山岳部の活動内容をよく調べ、よく考えたうえで決心しようと、私は駿河台の校舎の地下にある部室のドアをノックした。

部屋は天井の低い、八畳ぐらいのすすけた部屋だった。壁には部員の名札が掛けてあり、どこか知らないが雪山の写真が二枚ばかり。部屋の中央に飯場にあるような長机が置いてある。いや、山岳部とはなんときたないところだ。

ちょうど部員が二十人ばかりトレーニングから帰って、部屋の中で素っ裸になって着がえしているとところだった。そのうち、奥にいた上級生らしい部員にベランダに呼出された。

「われわれは、君の経験の有無は問わない。ここに入ってきている部員は、みんな君同様に山の

素人ばかりだ。想像したまえ、冷たい雪の中、吹雪、嵐と闘って目的をひとつにして、みんなが力を合わせ登ることを……。お互いが信頼し合い、ザイルで命と命を結ぶ。狭いテントの中で寝起きをともし、同じカマのメシを食い、お互いに助けあっていく。われわれ部員は、兄弟のような愛で結ばれている。この山岳部に入ってきた新人はだれでも、経験によって差別されることなく、山の基本の歩き方から教わってゆく。かえって君のような初心者の方が上達がずっと早い」

自分もそうだったのだと、その上級生の言葉は自信に満ち、一語一語に自分の肌で感じた体験がにじみ出ているようで、私の胸をうった。この上級生にすがっていれば、きっと私の求めている有意義な学生生活ができるだろうと、そのとき直感した。

「三日後に北アルプスの白馬で、新人を対象にした歓迎山行合宿をやる。君も参加してみないか」

ところが、その「白馬」とやらがどこにあつて、どんな山なのか私はまるっきり知らなかった。「いや、きょうは、山岳部とはどんな部なのか尋ねにきただけなんです。入部の決心はまだ……」

といいかけたが、その先輩は、

「心配いらん、装備はみんな先輩が貸してやる」

といって、他の部員を呼びつけ、部屋の中から靴下と登山靴を持ってこさせた。そして、かかとに穴のあいた、しょぼくれた厚い毛の靴下と、底のすりへった登山靴をはかされた。

「オー、君にぴったりじゃないか。ズボンやシャツはあすオレが持ってくる。ザックとビッケルは部室にある。地図はそんなに高くないから買った方がいい……」

まだ私の決心もつかないのにすっかり上級生ペースで話が進み、白馬新人歓迎山行の準備会では、

「きょうまた、われわれの同僚が一人増えました。植村直己君です。上級生はよく面倒を見てやって下さい」

と紹介されるハメになった。ペテンにかかったようだが、もうどうしようもない。

こうして私は明大山岳部員になった、というよりはさせられたのだ。保証人の赤木さんは、「いったん決めたことはやりぬきなさい」

とおっしゃった。

涙でうたった新人哀歌

新人歓迎山行は、四月の下旬から五月上旬の一週間だった。

汽車を中央線の信濃四谷駅(現 白馬駅)でおり、バスで細野村へ進んだ。はじめて見るアルプスの連山は雪を残し、岩と雪のノコギリのようなするどい峰々がそびえていた。車窓から信濃の景色を見ているうちはまだ楽しかった。

一行は、新人は空身で、上級生はでかいザックを背負い、八方尾根にある山岳部の小屋に入った。小屋の裏には、白馬岳、杓子岳、鍵^{やり}ガ岳の白馬三山がそびえ、登るにつれて信濃の山間^{やまあい}の田

んぼが見わたせる。シマ模様に残雪がある尾根の端にたおれかかったすすけた小屋……。また、「入部歓迎」の酒席も楽しかった。

山岳部に入ってよかったと思ったのはつかの間、翌日の白馬山行がはじまると、私の胸は後悔でうちひしがれた。新人は三、四十キロのザックを背負わされ、上級生のかけ声とともに登山が開始されたのだ。細野から二股を経て猿倉へ。ここは車道があり、登りもゆるやかでまだよかった。私は小さいときから百姓仕事で鍛えている。

しかし、三、四十キロの荷はだんだんこたえてきた。四月末なのに、噴水のように汗がふき出し、顔はもちろん、下着までびっしょり濡れてきた。上級生は一時間もノンストップで歩かせる。かけ声、それにちよつとでも列から遅れようものなら怒号だ。きのうまで山を見て楽しんだのに、もう景色を見る余裕もない。上級生は入部のときは仏だったのにもう鬼だ。怒号に追われて黙々と歩く。二時間、三時間……。雪路にかわつたとたん、足を滑らせてひっくり返ると、

「ウエムラ、何をひっくり返る」

「バカもん！」

とどなられる。隊から遅れると、ビッケルの柄でシリを、足を打たれる。上級生は野獣のように恐ろしかった。新人は数十名いたが、その中でいちばん小柄でいちばん弱い私が最初にばてた。そのうえ、雪の上に設営したテントでも、炊事と雑用でくつろぐ暇がなかった。新人はテントのすぐ入口に寝かされ、上級生の靴の雪おとしまでやらねばならなかった。

「いいぞいいぞと おだてられ

死にものぐるいで きてみれば

朝から晩まで 飯たきで

景色なんぞ 夢のうち

その夜、私はダンチョネ節で新人哀歌を教えられ、泣く思いで歌わされた。

雪上のトレーニングは上下、トラバース（横断）と、足が上がりなくなるまでやらされた。『滑落停止』では、急斜面を上級生の号令のもとにすべり落ち、シリが出ている、形がわるい、にぶい、など、またビッケルでくり返しシリを叩かれた。私はそのころナダレなどの遭難より、訓練合宿の方がよほど恐ろしかった。他の新人よりも経験と体力の劣っていた私は、へたをすると殺されてしまうのではないかとさえ思った。

もう山岳部なんかやめようか……。しかし、赤木さんの、

「合宿の厳しさを途中退部するなんて人間のクズだ」

という言葉が耳に残った。退部もできない。部を続けていくには自分で体力をつくるより方法はないと思った。

合宿山行が終わると、私は川崎市柿生^{かきお}の下宿先のお寺で、毎朝トレーニングをはじめた。朝六時に起き、九キロばかりの山道を走りまわるのだ。二十人ばかりいた新人も合宿山行ごとに二人かけ、三人減りして二年部員になったときにはとうとう五人になってしまった。もちろん私も残った五人のひとりだ。

一年部員のときは体力的に苦しかった。二年、三年部員になり、教えられる立場から教える立

場になると、自分の山の知識が未熟なので精神的に苦しんだ。やがて、山に対して自分なりの考えも定まってきた。一年に七つも合宿山行をやり、合宿だけで百日以上山に入り、そのうえ個人山行を入れると百二、三十日も私は山の中に入っていた。学業どころではない。

海外の山々を夢みて

北海道から東北、日本アルプスと山に明け暮れ、やがて私なりに登山への視野がひらけて、外国の山に登りたいと思うようになった。二年の終わるところから外国の山岳書を読みはじめ、ガストン・レビュファ著の『星と嵐』（近藤等訳）でつよくアルプスの魅力にひきつけられた。自分の山行にも自信が出てきた。

最上級生でサプリーダーになったとき、私は単独山行を試みた。黒四ダムから黒部峡谷の阿曾原峠を経て、北仙人尾根の頭に出、剣岳の北側にある池ノ平から剣沢をめがけて下り、黒部別山にのびるハシゴ谷だんご乗越しに出て真砂尾根をつめ、そのピーク（真砂岳）から地獄谷をめがけて下り、弥陀ガ原を経て、千寿ガ原に下った。奥大日岳から剣岳をやった合宿山行の帰りのことで、食糧は合宿の残りもので間にあわせた。テントなし、スコップひとつでの雪洞生活五日の行程だった。この山行は、自分がリーダーとして人の上に立つための試練と考えた。

私の単独山行は、外国に出てからはじまったものではない。新人の夏山行の前に、上級生の目

をぬすんでひとりでトレーニングに富士山に登ったこともあった。

私を外国の山へかりたててくれたのは、同僚の小林正尚だった。彼は私が「アマゾン下り」に挑んでいるとき、同級生の結婚式へ行く途中、交通事故で死んだ。彼は大学四年の夏山行のあとアラスカに飛んで氷河の山を楽しんで帰ってきた。日本では氷河が見られないから、彼が得意になって話す旅の様子は私をうらやましがらせ、ライバル意識を燃え立たせた。卒業してから就職なんかどうなってもいい、せめて一度でもいいから外国の山に登りたかった。それが自分にとってもっとも幸せな道だと思った。

外国といえば先だつものは金だった。私の山岳部生活には、両親は反対だった。だから、外国の山に登りたいといって、援助してくれ、などいえた義理ではなかった。零細な農家であるわが家の家計は、学資を送るのが手いっぱいであった。そのころ、アイガーをねらう日本人のニュースが外電で入ってきていた。

「そうだ、ヨーロッパ・アルプスに行こう。そして、日本にない氷河をこの目で見よう」

と私は決心した。資金のない私は、とうぜん現地でアルバイトをしてかせがなければならない。とはいったものの、フランス語もドイツ語も、イタリア語もできない。そんな私にヨーロッパでアルバイトの口があるだろうか。

そこで考えついたのは、生活水準の高いアメリカで高い賃金をかせぎ、パンとキュウリを食べて支出を減らせば、ヨーロッパ・アルプス山行の金がたまるのではないかということだった。ヨーロッパ山行まで、何年かかるかshれないが、とにかく日本を出ることだ。英語ができない、フ

フランス語ができないなどといったら、一生外国など行けないのだ。男は、一度は体をはって冒険をやるべきだ。

アメリカにもヨーロッパにも直接の知人がいるわけではない。しかし、幸い先輩の知人がカリフォルニア大学にいますというので、手紙でアメリカの事情を聞いてみた。その返事がすごかった。「このアメリカで、言葉ができずしてお金をかせごうとはなにごとだ。特技を持つならまだしも、無意味な山登りのためとは……。悪いことはいわぬから、事を起こす前に計画をやめた方が君のためによい」

というものだった。その言葉がかえって私を意地にし、やってやるぞ！ と闘志を燃え立たせた。

もう心は、外国行きしかなかった。卒業式も終わった三月中旬、私は五月に出航するロサンゼルス経由南米行きの移民船を予約した。私にとって幸いだったことは、貿易の自由化で観光旅行の道が開かれたことだ。私は有楽町にある旅行代理店に旅券を依頼した。目的はアメリカ経由のフランス、スイスの観光旅行、日程は十日間、持出し金は五百ドルと書いた。片道で横浜からアメリカまで十万八百円。持出し金五百ドルとは書いたものの、アメリカまでの片道切符の十万円をつくるのに手いっぱいだ。

私は大学四年の後半、阿佐谷の下宿の前にあった女子高校の増築工事に行き、高いやぐらの上で働くトビ職をやった。高い所で動きまわるのにはなれているので、こんなものはお手のものだった。夜は英語塾に通った。塾に通っても何もわからなかった。だが、山岳部とアルバイトと英